道東太平洋海域のハタハタの移動について

釧路水産試験場　資源管理部

研究の目的

道東太平洋海域に分布するハタハタは、日高群、釧路群、根室群の３つの系群がとして考えられている。しかし、系群別の分布や移動、さらには系群間の交流など不明な点が多いことから、主に十勝～釧路にかけての周辺海域を秋季に索餌回遊している群の移動傾向を解明するため、標識放流を2000年から2002年に実施し、この海域に分布するハタハタの特性について調査した。

研究方法

魚群分布調査の結果に基づき、十勝から釧路周辺までの道東太平洋海域の中から、音調津、浜大樹、大津、釧路、跡永賀周辺の水深約20～70m付近（図１）を標識放流位置に選定した。十勝海域は９月中旬、釧路海域は10月上旬に、小型桁曳網により漁獲されたハタハタに標識を装着し放流を行った（表１）。漁獲されたハタハタの体長測定結果は図２のとおりで、放流魚のサイズもほぼこの図によって代表されると思われる。また年齢は耳石の観察からほとんどが１歳魚であった。

研究の成果

① 標識魚のほとんどは、主にシシャモ桁曳網およびハタハタ刺し網で再捕された。その再捕尾数、再捕位置ならびにその内訳を表１、図３、４に示した。

② 釧路海域で10月上旬、および11月上旬に放流したもの（図中の赤、白、オレンジ）は、一部ではえりも周辺まで移動が確認されたが、そのほとんどは昆布森～厚岸沿岸の産卵場への移動であった。この結果からこの時期の釧路海域は、ほとんどが釧路群であると考えられた。

③ 十勝海域で９月中旬に放流した標識魚（図中の緑、黄、青）は、釧路～厚岸方面、えりも方面の各産卵場と思われる場所へ移動した。このことからこの時期の当海域は、日高群と釧路群が混在して分布しており、その索餌場となっていると考えられる。

④ えりも岬周辺よりも西へ移動したものはほとんどなかった。根室海域まで移動したのも見られなかった。

成果の活用面

当海域におけるハタハタの資源評価を行うにあたっては、系群単位もしくは海域ごとの適正な資源量の把握が必要であり、今回の調査結果は今後の資源評価を行うための基礎データとしての活用が期待される。また、今回の結果を漁業者等へ広く普及することにより、漁業者自らもハタハタの生態に関心を持ち、より一層の資源管理への高まりが期待される。

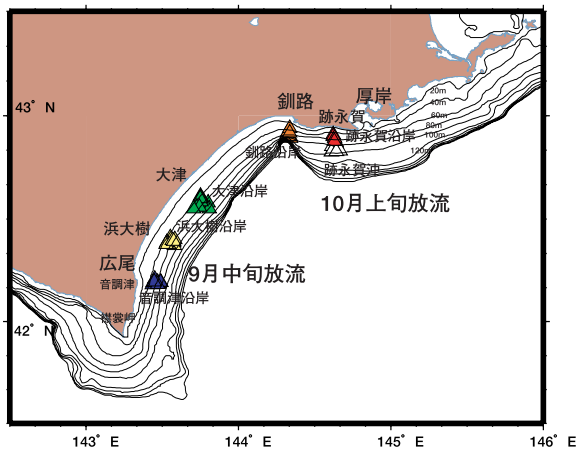

図1　標識放流位置(2000～2002年)
＊2000年の跡永賀沖の放流は11月上旬に実施した

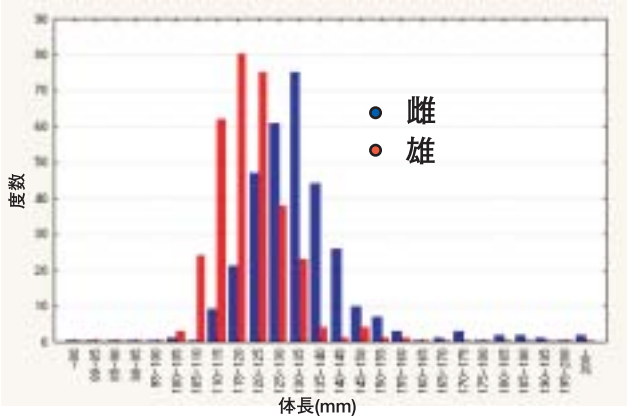

図2　放流位置で漁獲されたハタハタのサイズ

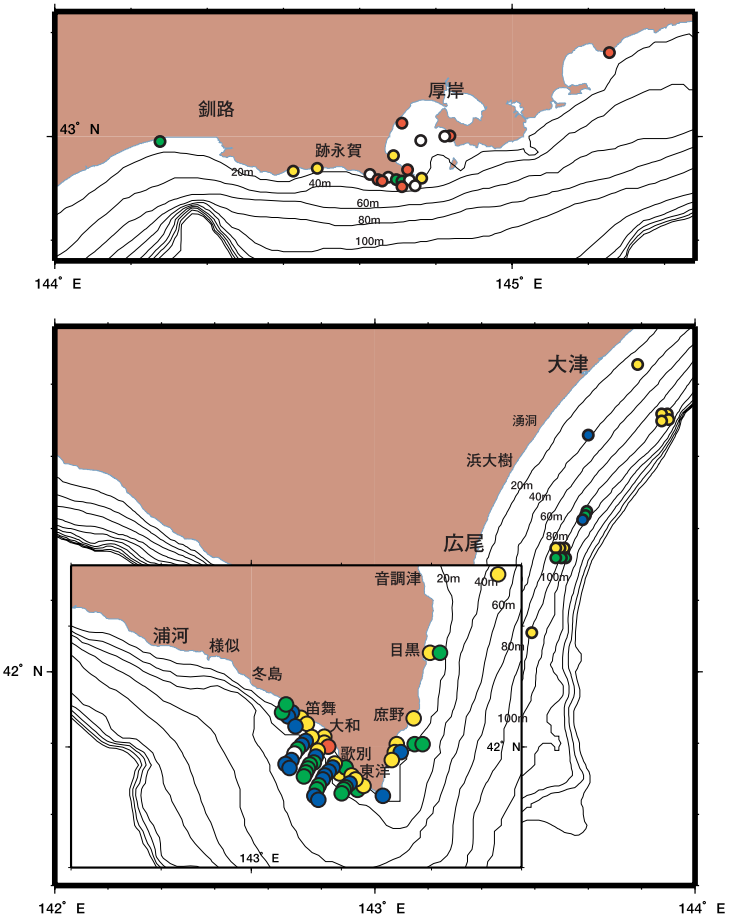

図3　標識放流魚再捕位置(2000～2002年)
(上：釧路周辺,下:襟裳岬周辺)
＊再捕位置に示した色は図1の放流位置の色を示す

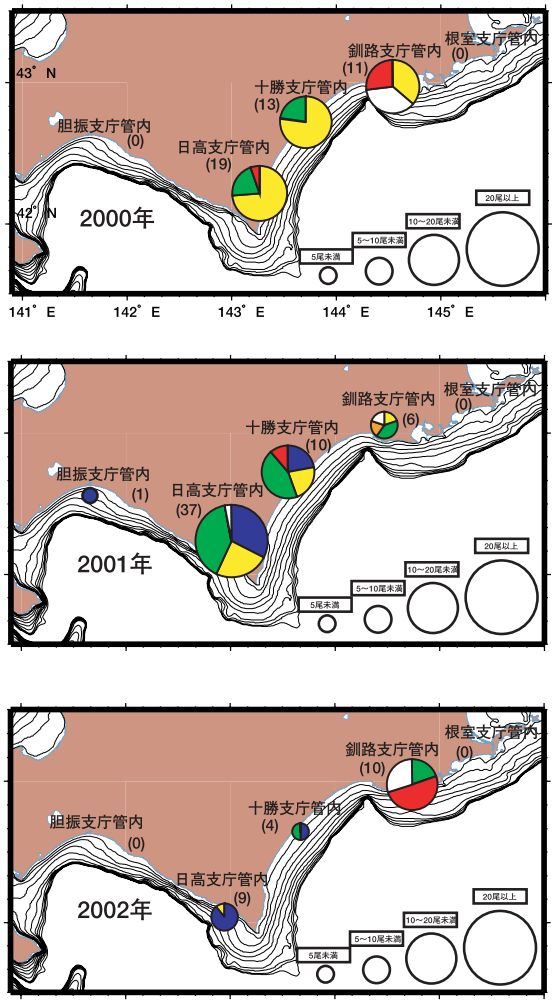

図4　再捕結果からみた標識魚の移動状況
＊円グラフの色の内訳は各放流位置を示す
＊（　）内は再捕尾数

表1　標識放流尾数,再捕尾数,および再捕率(2000～2002年)

放流位置	放流日	放流尾数	再捕までに要した時間（単位：月）と再捕尾数（単位：尾）						再捕率(%)
			～1ヶ月	～2ヶ月	～3ヶ月	～4ヶ月	4ヶ月<	不明	合計	
音調津沿岸	9月中旬	968	3	16			4	2	27	2.78
浜大樹沿岸	9月中旬	1059	5	12	22			2	41	3.87
大津沿岸	9月中旬	949	6	7	16			1	30	3.16
釧路沿岸	10月上旬	647					1		1	0.15
跡永賀沿岸	10月上旬	1567	1	7			2	1	11	0.70
跡永賀沖	10月上旬	1173	1	4					5	0.42
合計(再捕率は平均値)		6363	2	11	38		7	6	115	1.85

*跡永賀沖のデータには2000/11上旬のものも含まれる